

D 25 女子大生のいづく将来の家族像・住居像
京都女大家政 ○岡部 巍 豊島 俊

目的 将来の住居については小さい頃から夢をいだいていることが多いが、20才前後になるとそれがやゝ現実味を帯びてくる者が増えてくるように思われる。そこで学生が将来の家族や住居についてどのような像を画いているかを知るため、若干の調査を行った。

方法 冬休みに住居学を受講している学生を対象にして20年後の家族・住居についての像を書かせた。家族については自己と家族を設定し、その頃の予想年収についても記入させた。住居については様式、構造、大きさ、間取などのほか、所有形態、入手法、取得時期、入手金額などについても書かせた。その頃の経済情勢や建築方式などは不明であるので、それらは一応現状に固定した。

結果 調査結果を見ると、夢に近いものから現実味を帯びていると見られるものまで、その程度はまちまちであるが、総合的に各調査項目の最も多いものとその（百分率）を見ると、家族では自己は無収入の専業主婦（43.8）、家族数は4人（61.8）、夫の職業は会社員（64.4）で、その時期の収入は700万円台（25.3）であった。住居では戸建（93.2）の専用住宅（98.9）で在来工法の木造（42.5）が指向されており、広さは土地200㎡台（38.7）、住宅100～150㎡（52.7）であった。所有形態は土地は所有（88.3）住宅は持家（95.9）で、入手法は土地・住宅とも購入（39.0・42.1）であった。なお1回生のグループ（253名）と2回生のグループ（39名）の間に自己設定や住居の入手法などについて若干異なった傾向が見られた。